

学校に行かないほうがイイ！  
のかもしれない...と思ったりする。

ロージナ茶会ちゃんねる 創刊準備号  
白田 秀彰

おねがい

この回の動画を見る人は、予め

WiredVision 『現実デバッグ』 No.16 ~ 24

「教育制度批判 その\*」 シリーズ

を読んでおいてください。

<http://wiredvision.jp/blog/shirata2/>

## 1. すべては学びである

我々は白紙 tabula rasa で生まれ、棺を覆いてようやく定まる。 生きている限りは常に不確定要素が存在する。

1 秒先のこともわからず、0.4 秒前の情報を頼りに、今この時の現実に飛び込む。 脳の処理速度の問題。

「現実」として描かれる脳内の幻も、現実に飛び込むときの目論見も、すべて過去の経験にもとづいている。

過去を記憶し事例を呼び出し、現実で起こる出来事の仕組みを理解し、未来を的確に推理・予測 simulate することでしか、現実を自らのものとして制御できない。

- ・過去の記憶
- ・現実世界の仕組みの理解

すべては学びである。

例:

## 2. 知識は我らを自由にする

我らは全てを経験と記憶に頼っているわけではない。もし、**この世界に仕組みや法則があるのならば**、その仕組みや法則を理解することで、**未来に生じることを予測することができる**。

未来をより正確に予測することができれば、この世界で失敗することなどありえない。もちろん現実**は複雑であり、我々の理性には限界がある。予想外の事態もありうる。**

我々は、自らの望む通り自由に自らをそして現実を支配できるのであれば、成功と感じ幸福だろう。

したがって、この世界の仕組みや法則に関する知識は、あらゆる能力に優越する力であり、

**知識は我らを自由にする。**

例:

### 3. 智慧は我らを高みに置く

形而下の知識のみでは、我々の根源的な不安は解消されない。なぜ自我は存在するのか、なぜ世界は存在するのか、世界はなにを目的としているのか、我々はどこへ行くのか。

古今の哲学者・宗教家は、こうした「世界の外」についての考察を試み、「世界の外」 形而上から世界を把握しようと努めた。

その成否はわからない。とはいえ、仮に我々が「世界の外」から世界の存在・目的・結果について知ることができれば、その智慧は、我らに究極的な安泰をもたらすだろう。

究極的な安泰は、我らから不安や恐怖を取り除き、我らを何物にも脅かされない存在とするだろう。すなわち、

# 智慧は我らを高みに置く。

例:



## 4. 学問の場

古来、学問とはここまで述べてきた知識と智慧を探求し、獲得する営みを指す。教団や学校と呼ばれるものは、そうした探求を行う人々のための集団・組織として編成されてきた。

そうした組織では、

- a. 智慧を問う組織 神学・哲学
  - b. 知識を問う組織 社会科学・自然科学
  - c. 職業能力を問う組織 応用科学・工学・職業資格取得
  - d. 日常生活能力を養う組織 文化・伝統・常識・社会性
- とおおよそ階層化されていた。

知識も智慧も生活が与えてくれた

全ての人にとって、**日常生活能力を養う共同体は、存在して当然の知的基盤**であり、すべての人はそれぞれの状況に応じて、自分の力で生きていくための経験や知識、ときには智慧を獲得していた。

例:

石化した古の太陽熱力が解き放たれた

18 世紀以降の製造産業社会においては、世界における勝利は、科学技術知識・産業技術知識に大きく依存することになった。

例:

市場を制御する知識が貨幣的富を産み出すようになった  
19 世紀以降の金融産業社会においては、世界における勝利は、経済学的知識・金融知識に大きく依存することになった。

例:

動力と貨幣的富が現世の幸福をもたらしてくれた  
科学技術によってもたらされた産業文明と消費文化は、物  
質的な豊かさ 貨幣量の多さによって、**我々の根源的な不  
安を隠蔽することに成功した。**

ここで**知識を問う組織と、職業能力を問う組織**が成功と勝利  
のための重要組織となった。  
一方、**智慧についての学問は衰退した。**

**我々が考える「学校教育」のイメージの形成**

## 5. 産業社会・商業社会における学校制度

### 労働者養成機関

- a. それまで社会において、自分の生活を維持する経験と知識から形成されてきた人々
- b. 産業社会のルールの下で、近代産業技術を理解し、**機械と同調して働くことのできる労働者**
- c. 市場社会のルールの下で、金融や市場の仕組みを理解し、**市場と同調して働くことのできる労働者**

自分の生活への経験・知識を社会で蓄積するのではなく、また、形而上的な智慧を獲得することでもなく、**必要な労働者を養成することが、「教育」と呼ばれるようになった。**

## サラリーマンの優位

また、従来の第一次産業(農業)に比較して、第二次産業(工業)、第三次産業(サービス業)はより効率的に「貨幣」を獲得することができたため、労働者となることは、「勝ち組」として認識された。

しかし、

1. 労働者は、雇用されなければ貨幣を獲得することができない。雇用者の支配下
2. 労働者は、貨幣を生活物資と交換できなければ生きていくことができない。市場の支配下

サラリーマンが「勝ち」だったのは特定の産業・市場構造が存在していることが前提。

## 同じ枠内での競争の激化

よい報酬を支払う雇用者に採用され、不況期にも雇用を維持するためには、同じ労働者同士で競争し、労働者集団の上位に居続けなければならない。 **競争の開始・激化**

学校において、良い成績であること( 高い学歴をもつこと) は、優良な労働者であることを意味したため、**競争は学校においても熾烈になる。**

学校において、**良い成績とはペーパーテストで良い点数を獲得すること**を意味したため、ペーパーテストへ全能力を投入することが競争の中心点となった。



特殊能力への特化、普遍的能力の喪失

現在の「学校教育」は、記憶力・記号操作能力訓練に過剰に特化しており、研究職・事務職には適合的な内容となっている。

国民全員が研究者や事務労働者になるわけではないのに、なぜ皆が記号操作訓練を受けようとするのか？ 他の生活のあり方や生き方をまったく知らないからではないか？

競争が熾烈になるにつれて、幼少期から記憶力・記号操作能力訓練にのみ力を注ぎ、日常生活を生きる経験や知識がまったく欠落する青少年が増加している。

コンピュータ化によって事務労働者は少なくて済む  
昔は、単純な事務労働に多数の労働者が必要とされていた。  
また、多数の商業取引従事者が必要とされていた。  
しかし、コンピュータの発展により、より複雑かつ高度な記号  
操作能力がある人物以外は、事務労働者は必要とされなくな  
りつつある。

ここにおいて、雇用されなかった「学校教育に過剰適応した  
人物」は、完全に生活能力を喪失した無用の人となる。

人生の華である思春期をまったく無為な訓練に使い尽くして  
しまったことに気がついたとき、彼はどうなるのだろうか？

## 日常生活能力の優位

高等教育への進学率が 80%を超えるということは、大抵の人が記憶力・記号操作能力ばかりを訓練していることを意味する。

高等教育を受けた人に価値があったのは、社会の大勢が日常生活のための職業能力しかもたなかったときに、高等教育での知識、すなわち産業的知識をもった人が稀少だったから。

現在のように大抵の人が記憶力・記号操作能力訓練を済ませているときに、適性のない人までが、その能力の頂点を目指しつづけているのはナンセンスではないか？

誰にも迷惑をかけず文化的かつ着実な生活ができるほうが現在においては重要なことではないか？ むしろ稀少

現在の社会状況は、産業社会の行き詰まりを示している(ロージナ茶会ちゃんねる第一回参照)。一方、我々の日常生活能力は著しく衰退し、自分の生活を自分で律することのできない人が増大しているように思える。

6. 形骸化した学校制度は我らをダメにしていく  
近代制度としての学校は、近代社会において規律訓練ができていない年少者を市民や労働者へと作りあげる収容施設。  
刑務所(規律訓練に失敗した成年者の矯正施設)

学校で現在の社会状況に適合的な人材育成が行われているのなら、学校は現在もなお収容施設として合理的。

もし現在の社会において必要性が乏しくなった特殊な能力を限界まで伸長させ、社会不適合者を生み出しているだけならば、百害あって一利なし。

育ち盛り、動き盛りの青少年を全員一律に 12 年間にわたって、記憶力・記号操作能力訓練に駆り立て、その苦行の向こうに勝利・成功・幸福がないとわかっていたら、青少年達が学校に対して批判的になるのは当然のこと。

「学問」とは我々が自由になるためのものであったのに、現在の「学校教育」は我々を不自由にしている。...んじゃないか。

今必要とされていそうな技能

- ・調理能力
- ・清掃整頓能力
- ・家電製品の修理能力
- ・日用品の作成・修理能力
- ・日曜大工能力
- ・他人とケンカや交渉をする能力
- ・自己健康管理能力
- ・家計管理能力
- ・四コママンガで説明する能力
- ・円滑な対人関係能力 「お笑い」能力
- ・etc....